

答辞

本日は、私達のために、このように厳かで晴れやかな式典を催していただき、誠にありがとうございます。また、稲用理事長や平野学長からご厚情あふれる励ましのお言葉を頂きまして修了生一同を代表し厚くお礼を申し上げます。

私が大学院の門をたたいた目的は、私自身が体験した出産後の「身体の違和感」は何かという問いを明らかにするためでした。

入学後は、この問いの解明に向かい、「研究の基礎力」と「幅広い視点から物事を見つめる力」を身につける学びが始まりました。

この過程では、研究者としてだけでなく、教育者、看護職者として幅広い知識や経験を持つ先生方との出会いがありました。先生方からは様々な刺激を受け、学問の奥深さとともに、学びを深めることの意味とその楽しさを教えていただきました。

このような基礎的な学修と並行して、私が抱いた問いは「研究となり得るか」と問い続け、時間をかけ研究の柱を立てていきました。研究を終えた今、これがいかに重要であったかを実感しています。その後、多くの方々からご指導をいただき、論文の完成にたどり着くことができました。この過程では研究の幹となる部分から逸れそうになる事が何度となくありました。先生方は、その都度、なぜそのような状態になったかを説明してくださり方向性を示してくださいました。私は、この「道しるべ」を頼りに、一步一步、歩みを進め本日の日を迎えることができました。

これまでの学びは、看護学および看護の発展のためにはこのような研究的取組が不可欠であることを、身をもって学ぶ道のりでありました。この学びをしっかりと胸にきざみ、学び舎を後にしたいと思います。

最後となりましたが、私たちを励まし、熱いご指導をいただきました諸先生方、ご理解を頂き、ご支援いただきました職場の皆さま、研究にご協力いただきました皆様、そして、このチャレンジを応援してくれた家族に心より感謝申し上げます。

本学のますますの発展と、諸先生方のご健康、ご活躍ならびに在校生の皆様の一層のご健勝をお祈りいたしまして答辞とさせていただきます。

令和3年3月16日

看護学研究科修了生 代表 田丸 喜代子